平成 29 年度大阪府立三国丘高等学校
SGH フィリピンフィールドワーク報告書

１．実施日：平成 29 年７月 30 日～８月６日（７泊８日）
２．参加者：第２学年 SGH 授業選択生徒 20 名
３．付添教員５名
　元関西学院大学教授　西本昌二先生、首席　田中和代、教諭　大塚雅之、柿本早紀、田中洋平
４．目的
　フィリピンにおいて発展途上国の現状を視察し、人々の生活や問題点などを肌で感じ、課題研究である BOP ビジネスプランの作成に生かす。また、国際機関における研修を通じて国際支援の実情を学ぶとともに、エンドラン大学生との６日間の合同研修において海外の学生との理解を深める。

５．詳細報告

7 月 30 日（日）１日目

　関西国際空港に集合し、フィリピン航空でマニラへ。到着が１時間遅れたため、例年よりニノイアキノ国際空港が混雑していなかった。今年からホリデイインギャレリアにホテルを変更したが、直通で食事をするショッピングモールに行けるので、安全面や天候に左右されない点などでとてもよかった。生徒たちは元気な様子で、１日目を終了した。

7 月 31 日（月）２日目

　午前は、アジア開発銀行にて特別講義を受けた。毎年担当してくれている Michelle がアテンドしてくれた。
講師：Mr. Takeshi Shiihara, Portfolio Management Specialist, South Asia Department
　　Ms. Sonalini Khetrapal, Health Specialist, Sustainable Development and Climate Change Department
　生徒は活発に質問し、アジア開発銀行の事業内容や目的などを学んだ。同時に、国際機関で働く日本人のロールモデルに、国際機関で働くようになった動機や実際の仕事内容、働くために準備することなどについて直接話を聞くことができたことで、高校生にとっては大変実り多いものとなった。今年も中庭で記念撮影し、食堂で昼食をとった。

午後は、エンドラン大学でバディと初めて対面した。エンドラン大学では、本校との合同フィールドワークをもとに、新たに Leadership Program というカリキュラムを昨年から立ち上げ、そのカリキュラムを受講している生徒たちの中から選抜された 20 名が一緒に活動することになった。来比前にバディとメールでやりとりしていたとはいえ、直接会うのは初めてとあって緊張した面持ちの生徒たちだったが、フィリピンの学生たちはとても明るく親切で、対面後、ゲーム等をして生徒たちの緊張をやわらげてくれた。特にリーダーの Amber は準備段階から細部に気を配り、このプログラムのために献身的な働きをしてくれた。打ち解けた後生徒たちは、日本から考えてきたビジネスプランについてバディに説明し、アドバイスを受けた。

８月１日（火）３日目

午前中は前日に引き続きエンドラン大学生とビジネスプランについて協議した。

午後は、世界的に有名ないわゆるごみ山のある Payatas（パヤタス）へエンドラン大学生と共に向かった。Payatas は地名で、訪問したごみ処分場は正式名を Engineered Sanitary Landfills といい、Quezon City が管理している。 以前別の場所にあったごみ処分場が移転されたものであり（以前のごみ山はごみが崩れて多数の死者が出たため）、移転の際にメタンガスを集める装置を設置したり、ごみ分別の知識を広めたり、Payatas の住民の生活向上のための取組みをしている。フィリピンにはごみ焼却場がないので、ごみを圧縮して埋め立てるしかないのだが、いまだにごみの分別などによるわずかな収入で暮らしているいわゆるスカベンジャーと呼ばれる人々が Payatas の町を形成している。バスの中から貧しい Payatas の町並みや人々の様子を見つつ、パネル展示などがある NGO のブースを訪問した。今回で 3 度目の視察となったが、昨年たくさんのスカベンジャーがごみを集めていたごみ山はいっぱいとなり、最終的な埋め立て地とするためにブルドーザーが土を入れている段階であった。Payatas は水源の近くにあり問題もあることから間もなく閉鎖し、ごみ埋め立てを別の場所に移す予定であるとのことであった。生徒には、Payatas の経緯や閉鎖される見通しであること、ごみ問題はどこの国のどこの地域でも深刻な問題であり、どのように解決していくのか考えていく必要があること

等を説明した。現地のスタッフに、日本から持参した古着を渡し、Payatas を後にした。

8月2日（水）～4日（金）4～6日目

エンドラン大学の学生と一緒に GK Farm (以下 GK) での２泊３日の研修を実施した。GK は、起業家を育成することによってフィリピンにある資源を使った産業を発展させ、人々に良質な地産地消の食品や製品等を供給するとともに貧困問題を解決していくことを理念とした、広大な農場である。GK とは“Gawad Kalinga”の略で、意味は “give care”。現在、GK には世界中から優秀な若者が集まり起業したり、学んだりしている。到着時には創始者の Tony Meloto がウェルカムスピーチをしてくださり、また、元々は最貧困の暮らしをし、生きるために盗みを働かざるを得なかった若者たちが、GK でビジネスを学び海外留学を果たし、今は希望をもって生活している話などを聞かせてくれた。今年で３回目の訪問であったが、２月に開かれたサミットという大きなイベントの影響で、以前よりも食堂が素晴らしい建物になっていたり、プログラムに様々なワークショップが組み込まれていたりしていて、事業が順調に展開していることがわかった。生徒たちは様々なプログラムに参加し、英語を使って意見を交換し、発表を行った。今年も本校生徒会より、GK の中にあるビジネス学校 LEED およびコミュニティの子供たちに文房具、バスケットボールなどのボール類を寄付した。GK Farm での研修内容は以下の通り。

DAY 1	
10:00	Arrival at the Farm, Check-In
11:00	Orientation and Expectation Sharing
12:00	Lunch
13:30	Plush And Play Demo
14:30	First Harvest Demo
15:30	Ambension Silk Livelihood Workshop
19:00	Dinner
20:00	Short Processing and Reminders for Day 2
22:00	Lights Out
DAY 2	
6:00	Farming Activity
7:30	Breakfast
9:00	Farm Hope Tour
12:00	Lunch
13:30	SEED Enterprize Pitch Workshop
15:30	Farming Race
19:00	Boodle Fight
20:00	Cultural Night

DAY3	
7:30	Breakfast
9:00	MAD Travel Marketing & Branding Workshop
12:00	Lunch
13:30	Departure from the Farm

8月5日（土）7日目

この日はエンドラン大学にて、午前中プレゼン準備、午後プレゼンとなった。エンドランの学生たちは、スライド作りやスピーチの構成などよく三国丘の生徒の面倒をみてくれ、午後の発表は三国丘の生徒がプレゼンし、質疑応答はエンドランの学生がサポートする形で行われた。また、昨年のリーダーである Kamiekah や昨年参加してくれた生徒が駆けつけてくれた。

発表内容は以下の通り。

1. GUGO SOAP　2. VATAKI　3. HANIKO
4. MORINGOOD　5. MASAYA MOOO　6. ENKAHON

各班とも、日本で練ってきたビジネスプランが、フィリピンでの経験やエンドランの学生の協力で新しいアイディアに生まれ変わっていたり、具体的に進化したりしていた。日本にいるだけではわからないフィリピンの若者の文化や教育プログラムについても知ることができた。

その後、Closing Ceremony としてエンドラン大学学長の Mr. Ed Rodriguez、本校から西本先生にスピーチをいただき、一人一人に修了証を贈呈したあと、記念植樹をした。その後、フィリピンの遊びや日本の遊び（だるまさんが転んだ）を一緒に楽しんだ後、エド学長が用意してくださったフィリピン料理をいただきながらお別れパーティをした。生徒は自主的にエンドラン学生リーダーの Amber にお礼を述べるなど、最後の夜を楽しく過ごした。エンドランの学生はみんな優秀で面倒見がよく、年下の高校生相手にいろいろと尽力してくれた。ありがたいことに、昨年参加して勉強になったからと今年も参加してくれた学生も多かった。三国丘の生徒にとっても一生のつながりができたのではないかと思う。

夜ミーティングを行い、最後のスケジュール確認をするとともに西本先生よりフィールドワークを締めくくるお言葉をいただいた。生徒代表が、このような特別なフィールドワークをお手配いただいたことへの感謝を西本先生へ申し上げて、最後のミーティングが終了した。

8月6日（日）８日目

１０時にホテルを出発し、１１時前に空港に到着、予定通り日本時間午後 7 時頃関西国際空港到着、解散した。

６．おわりに

本校が来年度で SGH 指定最後の５年目を迎えるということで、指定後もエンドラン大学との Leadership Program を続けていくために、エンドラン大学のスタッフと更なる発展形について話し合うことができた。来年度はその試みとして、エンドラン大学の寮に滞在し、エンドラン大学生としての生活を体験しながら英語のレッスンを受けたり、今まで通りエンドラン大学生とバディを組んで貧困層の暮らしを見に行ったり GK Farm に滞在したりする予定である。

最後に、昨年に引き続きこのフィールドワークを実現して下さったエンドラン大学の Ed 学長、Leadership Program の Marivic 教授、学生代表の Amber、西本先生、そしてアジア開発銀行、GK Farm 関係者各位に心から感謝申し上げたい。

７．生徒感想

・フィリピンフィールドワークにおいて、自分の目で見ることで実際に貧困を実感し、以前はフィリピンでの貧困から人々を救いたい、助けたいと思っていたが、救わないといけない、助けないといけないという義務感を感じた。生まれた瞬間に決まる不平等、不自由は、やはりあってはならないことだと強く再認識した。ADB での講義や GK Farm での研修において、フィリピンのインフラ整備の重要さを感じ、自分が将来やりたい仕事や夢は全く考えられてなかったが、自分は発展途上国のインフラ整備に携わりたいなと思った。また、英語での講義やエンドラン大学生との交流の中で、英語能力の重要さを感じたうえ、外国人と交流することはとても刺激になり、自分とは文化の異なる人の価値観を理解することが重要なだけでなく、自分の考えを伝えることも重要だと思った。このフィールドワークはとても貴重な経験であり、少しでも世界を知ることができた。この経験は一生の財産になると思う。

・フィリピンを実際に訪れて、実際に自分の目で見て、衝撃的だったことがたくさんあった。けれど私は先輩や先生からもっとひどい現状を聞いていたので、それほどでもないと思うところも多々あった。自分なりになぜかを考えてみると、日本にとっての 1 年は短く、それほど「発展した」と思うようなことは少ないけれど、フィリピンにとっての 1 年はとても大きく、少しずつ改善の方向に向かってきているのかな、と思った。それでも現状はすごくひどい。

BOP ビジネスをより良いものにしたい、世界から貧困をなくしたい、国際社会に何か役に立つことのできる人材になりたいと、前にも増して強く思うようになった。帰りのバスで友達と、『もう 10 年くらいはフィリピンに来ることはないかもしれないね』と話した。その時に、次訪れた時にはフィリピンはすごく発達していて、スラムやボロボロな家が減って、街でストリートチルドレンの姿を見かけなくなって、高いビルがいっぱい建っているのかもしれないなと思った。そうなってほしいと思う。

・まずこのような機会を与えてくださった西本昌二先生や田中和代先生をはじめとする先生方やエンドラン大学、両親等々に感謝します。自分とは違う考え方、価値観の人たち（フィリピン人）と会って交流し、新たな発見につながったことは自分の世界観や視野が広がったのは確実である。８日間のフィールドワークは行く前はとても楽しみであったし、心配な部分もあったが全日程を終えてみるとあっという間だった。これはすごく充実した８日間であったからだと思う。自分は将来発展途上国に関わる仕事をしたいと思っているので、今回のフィールドワークは今後の人生にアドバンテージをもたらすにちがいないと思うし、参加して本当に良かったと思う。ADB での

研修、エンドラン大学生との交流、スモーキーマウンテンの研修、GK Farm での研修など、帰国後思い返すとすごいことをしていたと感じた。フィリピンは深刻な問題が多々あるが、町の雰囲気や人々等を見てみると、決して希望を失ってないように思えた。だから「貧困」だからと言って人々は不幸ではないと感じた。自分はたまたま日本という豊かな国に生まれたし、たまたま貧困の家庭に生まれた人もたくさんいる。でも、自分が何者であろうと、一回限りの人生をどれだけ楽しいと思えたかが大事だと考える。楽しさの基準は環境や状況によりまちまちであるが、フィリピンで出会った人々と同様に、自分の置かれた立場を考えて日々全力でがんばりたい。そうすることで、とても貧しい人々と交流する際、自分の生き方に自信を持ち、正々堂々とした態度で話をすることができる気がする。途中、自分たちのいたらないことで先生方から指導を受けたり、お互いの思いを話し合うことができたりしたので、そういう面でも非常に良かったのではないかと思う。高校生でこのような経験をさせてもらえてありがとうございました。

・３月の米国ポートランド市研修では、建物の価値を投資によって高めたり、市民の思いを local designer が建設物に反映したりすることや､ソーラーパネルの設置やグリーンビルディングなど、環境に配慮しながら今ある生活を更に良くしていくためのものを主に学んだ。一方フィリピンでも､私たちが考えている BOP ビジネスプランのように､生活の質を向上させる取り組みが必要だと思った。しかし私はポートランドでは、この問題は早急に解決策に向かって取り組まなければいけない、と感じた場面はあまりなかった。ポートランドではどこに行っても比較的綺麗な家が立ち並んでいて、道路も清潔であった。フィリピンでは、高層ビルが建っているすぐそばにもゴミの入った袋がつまれており、もはや家かどうかわからない小屋のようなものもあった。ポートランドでは日本の未来像、フィリピンでは過去の日本を見た気がした。フィリピンは、何十年後かには発展してポートランドのようになっているのかもしれないが、今はその想像ができない。

８．アンケート結果

	%			
	とても良かった	良かった	あまり良くなかった	良くなかった
1 フィリピンフィールドワークは全体としてどうでしたか。	95%	5%	0%	0%
2 アジア開発銀行での研修はどうでしたか。	42%	53%	5%	0%
3 Payatas視察はどうでしたか。	26%	68%	5%	0%
4 GK Farmにおける研修はどうでしたか。	84%	16%	0%	0%
5 Enderun大学生とのBuddy Systemはどうでしたか。	100%	0%	0%	0%
6 Endurun大学でのプレゼンテーションはどうでしたか。	26%	37%	37%	0%
7 ホテルはどうでしたか。	89%	11%	0%	0%
8 食事はどうでしたか。	47%	53%	0%	0%

以上